
光と闇の狭間

葦桜 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇の狭間

【Nコード】

N1715I

【作者名】

葦桜 紫苑

【あらすじ】

これは昔の、遠い昔の話。

自らの大切な者を守るために、大切な者を奪い返すために戦った、光と闇の狭間の話。女性は話す、子供達にゆっくり一言一言、語り継いでほしい話だから。

夢を見る、何度も何度も同じ夢を。

その夢はとても幸福な夢で、あの時のように君と共に空を飛ぶ夢、目を細めたくなるほど輝く青の中を、白い純白の翼で飛び続けた、何処までも行ける、君の手を握り締めたいば……………。

自然の中で自由に生き、食物連鎖の中で死んで行くのと、暖かい手の中で、飼いならされて死んで行くの、どちらが幸福だろう、どちらも知っている君は、何を選びたい？

深い深い森の中、空はこんなにも明るいのに、地上は闇で覆われている、この世界は統一され、法と秩序が世界を支配し、その枠組みの中で生きられない者達は、人が作った流れに流され闇に落ちて行く、這い上がる力も奪われ、反逆する心も枯らされる、ルールを守れないものは、そのルールのある世界で生きる事は不可能、どんなに去りたくても、去ることが出来ない様に、鎖を巻きつける連中もいる。

君の居る光射す世界、僕の住む光閉ざす世界、同じ大地で続いて

いるのに、近寄る事さえ出来ない、壁何か無いのに、見えない壁が大きく立ち塞がっている。遠くに見える大きな光を見て考える、君の心を・・・・・・・・。

幸福なのかも、不幸なのかも、ましてや生きているのか死んでいるのかも分からない、それでも心にある決意は揺るぐことを知らない。

深い森に生息する木々達、本当の色は闇に飲まれ分からない、地上の色は全て同じ、でも見上げる空は青、その事実が在るだけで、人々は進む、希望を見出した人の心は強く力強い、そしてとても残酷な手段を使う。考えただけで馬鹿馬鹿しい事は分かっている、それでも動かずには居ないほど、時は経っていない。

幸福な者が居れば不幸になる者が居る、幸福な者が「不幸」の存在に気付けたなら・・・・・・・・いや無理な話だ、例え気付いたとしても、例え知っていたとしても、その事が不幸への架け橋となるかも知れない、自分ならしない、それが破滅に向かう道でも、自らの幸せを壊すことは無い。

目を開けていれば蘇る、君と見つめた世界、目を閉じると残酷な夢が瞼の裏側に焼きついて離れない。引き離された手を、守れなかった存在。

揺らぐことの無い心。

《世界は統一され、法と秩序が世界を支配し、その枠組みの中で生きられない者達は、人が作った流れに流され闇に落ちて行く、這い上がる力も奪われ、反逆する心も枯らされる、ルールを守れないものは、そのルールのある世界で生きる事は不可能、どんなに去り

たたくても、去ることが出来ない様に、鎖を巻きつける連中もいる。》

《希望を見出した人の心は強く力強い、そしてとても残酷な手段を使う。》

どんなに心を碎かれ、奪われても、何度だって生まれてくるものがある、それを知らずに優々と生きている者達に言って遣りたくない、
「愚かだ」と。

「ずっと、君を取り戻す事だけを考えていたんだ。」

闇は光射す方に話しかけた、遠くから仲間の声が聞こえ、振り返り剣を握り締めて小さく笑った。

これから悲劇が繰り広げられ、惨劇が巻き起こる、幾多の血が流れ、多くの血が混ざり合い、世界を一つに変える、後悔しても遣った事を悔いる事は無い、だって奪われたものを奪い返すだけ、僕達は何も得てはいない。

それは昔の話、途方も無いくらいの遠い過去の話。

世界を一つに統一しようとした者、でもそれは相手の何かを奪い、自分の思想を押し付ける事、そしてそれに反発する者、奪われたものを奪い戻しただけ、でもそれは、大切な物さえも捨てる行為。気付いていたのか、気付かない振りをしていたのか、今となっては知る者も居なければ、知る術も無い。

そうこの話は、光と闇を一つにしようとした話……光と闇を元に戻そうとした話……。

双方の思い打ち砕かれ、何年もの悲劇の先に果てが生まれ、血は混じり光と闇が結ばれた。

「そして、その戦いは終わり、互いにその思いを汲み取り、世界は一つになり光と闇は二つ、その狭間で戦ったから、夕日はあんなにも赤く、町を血色に染める。」

それを聞いていた子供達は、目を見開きキョトンとしていたが、直にブーイング嵐を起こした。

「何だよそれ、子供だからってバカにしてるだろ。」

「あー時間の無駄だった、聞いてて損したよ。」

「もう少し、マシな話聞かせろよな。」

「まっ、おばさんには、こんな話しか浮かばないか。」

その言葉に子供達は爆笑したが、小さく何かが切れる音がした事には誰も気付かなかった。

「私はまだ、二十四だー！ー。」

蜘蛛の子を散らしたように、子供達はあちこちに逃げていった、追いかけて様としたが、すばしっこくて、早い、とても捕まえることは出来なかった、そして女性は酷く落ち込んでいた、まだ二十四歳と思っていたが、もしかしたら、もう24歳なのかもしれない、

体力に差がありすぎる。

座っていたベンチに戻ると、そこには逃げていった子供達と一緒に
なって話を聞いていた少女が、ニコニコしながら、女性の帰りを
待っていた。

「もう遅いから、帰りなさい。」

優しく言っていると、少女は大きな目をさらに見開いて、上目遣いで見
つめてくる。

「昔、人には羽があったの？」

「さあ、でも大地を歩くのに、羽は邪魔だから無くて良いんじゃない。
ない。」

「そのあと二人はどうなったの？」

女性は少し困ったような顔をしたが、少女はそんなの関係ないと
言わんばかりに、目をキラキラ輝かせ、次の言葉を待っている。

一つ溜め息を付き、目線が合うようにしゃがむ。知りたいという
好奇心、瞳が訴える幸せな結末、どんな言葉を期待しているかは直
に分かった、でもこれは、こんな風な話ではない。

「さあ分からないな、今では知る術は無いから、だから結末は自
分で考えなくちゃ、これはそういう意味の昔話だから、本当にあつ
た話なのかも、どういう結末かも、人それぞれ違うの。」

そう言っていると、難しすぎるのか、眉をひそめて首を傾げている、そ

の様子を見て女性は優しく微笑み、少女の頭を撫で聞いた。

「この話は本当の話だと思う？そしてこの話の結末はどうあってほしい？」

「本当の話だと思う、きっと二人は幸せになったと思う。」

きっとそうに違いない、自分に言い聞かせるように少女は言い、女性も否定はしない。ぱあっと花が咲きほころぶ様な笑顔で、薄暗くなった世界をも輝かせる様な微笑みに、女性も自然と笑顔になった。

「もう遅いから帰りなさい。」

「うん」と目を輝かせながら、走って行く後姿を見ながら、女性の手を振った、遠くの方でバイバイと少女が小さな手を振っているから。

人の気配がなくなり、昏間のあの賑やかな光景が思い出せないほど、夜の公園は殺風景で、静かだ。

ベンチに深く座り、星も見えない空に手をかざす、そして女性はゆっくりと目を閉じ、瞼の裏に焼きついた、過去に思いを馳せる。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1715i/>

光と闇の狭間

2010年12月26日02時18分発行